



## 坂本龍馬 ～さまざまな出会い～

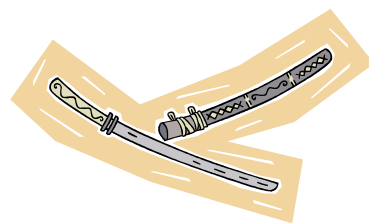
坂本龍馬を幕末維新の一大ヒーローとすることに異論のある人はまずいないでしょう。龍馬の存在なくして維新への歴史を語ることはできないと言っても、決して過言ではありません。

しかし、いかに彼が稀有の才能や発想力を持って八面六臂の活躍をした人物であるとは言え、彼一人の尽力によって幕末維新が成ったわけではもちろんありません。龍馬自身も、さまざまな人々との出会いを経て、自らの考えを修正しつつ、混乱の幕末を生きてきた一人なのです。

今回は、そんな龍馬が出会った人々を同時に取り上げながら、彼の偉業を見ていきましょう。

### ■ 攘夷志士としての龍馬

坂本龍馬（本名「直陰」のち「直柔」、龍馬は通称）は、天保6年11月15日（1836年1月3日）、土佐藩郷士（下級武士階級）の次男坊（末子）として生まれました。幼少の頃の評判はあまり芳しくなく、「よばれ（寝小便）たれ」「湊垂れ」などからかわれています。しかし龍馬はその後剣術の才に目覚め、14歳から通い始めた小栗流で5年後には目録を伝授されるほどの腕前に成長します。そしてさらなる剣術修行を求め、19歳で江戸に剣術修行に旅立ちました。



そんな龍馬を江戸で待っていたのは、黒船との遭遇でした。沿岸警備を命じられた土佐藩の一員として動員された龍馬は兄権平にあて、「異国船処々に来り自由に候へば、軍も近き内と存じ奉り候。其節は異国の首を打ち取り、帰国仕り可く候」と手紙を送っています。この当時の龍馬は、他の多くの若者と同じく、血気にはやった攘夷青年だったのです。

### ■ 開国への目覚め ～ 勝海舟と龍馬 ～

安政元年（1854）に土佐に帰国してからも、龍馬の方向性はまだ定まりません。安政3年（1856）には江戸を再訪してさらに剣術の修業を積み、安政5年（1858）には「北辰一刀流長刀兵法」の目録を得て帰国しました。その後、遠縁の武市半平太（瑞山）が土佐勤皇党を結成すると、龍馬はその第9番目に名を連ね、文久2年（1862）には武市の使者として長州藩の久坂玄瑞と会い、武市宛の手紙を託されています。

その一方、後の龍馬を確立する出会いもこの時期にありました。初の帰国後に河田小龍を訪ねた龍馬は、ここで最初の開国への薫陶を受けています。また、後にこの河田門下からは近藤長次郎、長岡健吉などの海援隊隊士が育っていくこととなります。

そして、龍馬にとって決定的な出会いが、文久2年（1862）10月に訪れます。当時の軍艦奉行並、勝麟太郎（海舟）との邂逅です。当初、桶町千葉道場の千葉重太郎と勝を訪ねた龍馬は、勝を斬るつもりだったと言われていたようですが、おそらくその胸の奥底には、河田から聞いた異国情報があったと思われます。だからこそ、勝の国防と貿易を兼ね備えた開国論に感銘を受け、正に思想的転回と言える勝への弟子入りを申し出たのです。

## ■ わずか5年間の活躍 ～ 東奔西走・そして暗殺まで ～

龍馬が勝に弟子入りした文久2年から、近江屋で暗殺されるまでの期間は、わずか5年余り。ですが、この5年こそ、龍馬が正に八面六臂の活躍を見せた期間でした。

弟子入り翌年の文久3年（1863）、勝と幕府政事総裁職松平春嶽の骨折りで脱藩を赦免されたのち、神戸海軍塾設立資金の援助を求めて福井藩に向かい、5千両という大金を借り受けることに成功、10月には海軍塾の塾頭に就任します。また、この年には開明的な幕臣大久保一翁に大政奉還の雛形を聞かされてもいます。ただ、この年の後半から公武合体派の巻き返しにより攘夷派への激しい弾圧がはじまり、1年も経たぬうちに龍馬は再び脱藩の身となってしまいます。


それでも龍馬は勝の下、精力的に動き回ります。元治元年（1864）には、勝の紹介で横井小楠、三岡八郎（由利公正）らと好を結ぶとともに、薩摩の西郷隆盛と対面します。ここでの対面が、後に海軍塾閉鎖後の龍馬を救い、さらには薩長同盟へとつながっていくこととなります。

慶應元年（1865）閏5月には、薩摩との連合を説くべく長州藩の桂小五郎（木戸孝允）と接触、この時には土佐藩の中岡慎太郎らの骨折りにも拘らず、西郷のドタキャンで交渉は不成立に終わりました。しかし龍馬はその失敗を逆に活用し、薩摩藩の負い目を利用して薩摩名義で長州の武器購入支援に成功、逆に長州からは薩摩に兵糧米が流れ、薩長間についてパイプを通じさせました。

慶應2年（1866）1月、薩長同盟が成立します。ただ、桂はこれが口約束だけにならないかと龍馬に手紙で不安を訴え、龍馬はそれに応じて手紙の裏書に同盟内容を記してその証人となりました。一介の脱藩浪人が二大藩の同盟を保証するという、前代未聞の珍事です。

一方、龍馬自身も慶應元年に薩摩藩の援助を得て貿易会社「亀山社中」を設立、これは後に土佐藩の下で「海援隊」へとつながっていきます。そんな中、慶應2年2月には寺田屋で新撰組を含む幕吏から襲撃を受け、負傷しながら辛くも逃げのびます。

そして翌慶應3年（1867）、龍馬は周囲が驚愕する行動に出ます。親友、武市半平太（瑞山）の仇ともいえる土佐藩上士の後藤象二郎と手を組んだのです。この年に組まれた薩土盟約と、その直前に龍馬と後藤が夕顔艦内で起草した「船中八策」が、土佐藩山内容堂の「大政奉還」建白書へと繋がっていきます。

 **知っていますか？ ～ りゅうま？りょうま？竜馬？龍馬？ ～**  
「龍馬」という字は、慣用音では「りゅうま」と呼ぶのが一般的です（例えば将棋の駒などはこの呼び方ですね）。しかし、漢音では「りょうま」という音もあり、龍馬の自筆の手紙に「りよふ」と署名があること、同時代の人が龍馬を語る時に「良馬」と書いたものがあることなどから、龍馬の読みは「りょうま」で間違いのないものとされています。

ちなみに、「竜」は「龍」の古体字にあたり、龍馬自身は「竜馬」と表記したことはないそうです。それでも「竜馬」の表記が盛んなのは、やはり『竜馬がゆく』の影響が大きかったのでしょうか。

ですがこの結果、龍馬は周囲の多くを敵に回すこととなります。幕府側からは幕府を終わらせた張本人、薩摩長州からは武力討幕を邪魔した裏切り者として。こうした中、ついに起きてしまったのが、慶応3年11月15日（1867年12月10日）の龍馬・中岡暗殺事件だったのです。犯人は当初、新撰組と目されましたが、後には今井信郎の供述などにより、京都守護職の見廻組が最有力とされることになりました。ただ、この暗殺には未だに謎が多数残っており、本当に見廻組によるものかといった真犯人説のほか、見廻組を操った黒幕説などがさまざまに論じられ、日本近世史上におけるミステリーの一つに数えられています。

## ■ 死後の名声 ～ 龍馬を有名にした三つの契機 ～

藩士・志士の間では知られていた龍馬でしたが、一般の人々にその活躍が広まったのはむしろその死後のことでした。龍馬を有名にした大きな契機は三つあるとされています。

最初に龍馬がとり上げられたのは明治16年（1883）、『土陽新聞』に連載された坂崎紫爛<sup>さかざきしらん</sup>「汗血千里駒<sup>かんけつせんりのこま</sup>：天下無双入傑海南第一伝奇」でした。これがさらに三篇に分けて出版されたことで、龍馬の活躍は一気に一般の知るところとなります。

そして明治37年（1904）4月13日、日露戦争勃発直後の『時事新報』には驚くべき新聞記事が載ります。葉山滞在中の皇后の夢に白装束の龍馬が現れ、海軍の加護を申し出たというもので、これは後に5月28日の『萬朝報』でも取り上げられました。当時の宮内大臣であった田中光顕（高知出身）が龍馬の写真を取り寄せて見せたところ、夢に出てきた人物に間違いないとされたということで話題になりました。



そして、現代において龍馬の名を不動のものとした契機と言え、司馬遼太郎『竜馬がゆく』に尽きるでしょう。司馬流の筆致で生き生きと描き出された龍馬像に憧れ、ファンになった人たちは数えきれないことと思います。ただ、先の『汗血千里駒』もそうですが、これらの龍馬伝があまりにも有名になったため、史実とフィクションの境目があいまいになり、現在でも真の龍馬像を探るのを難しくしているという事実も覚えておくべきでしょう。

2010年の1月からは、NHKの大河ドラマで龍馬が取り上げられます。今回もきっと龍馬は大きく注目され、そしてまた、新たな研究が生まれることでしょう。果たして龍馬は今後、いかなる話題を提起してくれるのでしょうか。

## ■ より詳しく知りたい方へ ～ 県立熊谷図書館にある関連の資料～

(伝記資料など)

- ・『案内図録』高知県立坂本龍馬記念館 1995.11 【熊 289.1/サ/】
- ・『坂本龍馬全集〔本編〕』宮地佐一郎／編集・解説 光風社書店 1978 【熊 289.1/サ/】
- ・『坂本龍馬伝(日本伝記叢書)』千頭清臣／著 新人物往来社 1995.7 【熊 289.1/サ/】
- ・『龍馬:最後の真実』菊地明／著 筑摩書房 1998.8 【熊 289.1/サカ 008/】
- ・『共同研究・坂本龍馬』新人物往来社 1997.9 【熊 289.1/サカ 008/】



- ・『坂本龍馬(岩波新書 新赤版1159)』松浦玲／著 岩波書店 2008.11 【熊 289.1/サカ 008/】
- ・『坂本龍馬関係資料:国指定重要文化財』京都国立博物館 1999.8 【熊 289.1/サカ 008/】
- ・『坂本龍馬事典(コンパクト版)』小西四郎／〔ほか〕編 新人物往来社 2007.3 【熊 289.1/サカ 008/】
- ・『坂本龍馬(教科書が教えない歴史人物の生き方10)』小宮宏／著 明治図書出版 1997.11

【BM 児童//】

(龍馬暗殺)

- ・『堂々日本史 第24巻』NHK取材班／編 KTC中央出版 1999.7 【熊 210.04/トウ/】
- ・『坂本竜馬を斬った男:幕臣今井信郎の生涯』今井幸彦／著 新人物往来社 1983.8 【熊 289.1/イ/】
- ・『龍馬暗殺完結篇』菊地明／著 新人物往来社 2000.8 【熊 289.1/サカ 008/】
- ・『龍馬暗殺の謎:諸説を徹底検証(PHP新書449)』木村幸比古／著 PHP研究所 2007.3

【熊 289.1/サカ 008/】

(龍馬に関わった人たち)

- ・『勝海舟自伝:氷川清話』勝海舟／〔著〕 広池学園事業部 1967.6 【熊 289.1/カ/】
- ・『幕末維新の個性 4 西郷隆盛と士族』落合弘樹／著 吉川弘文館 2005.10 【熊 210.58/ハク/】
- ・『幕末維新の個性 8 木戸孝允』松尾正人／著 吉川弘文館 2007.2 【熊 210.58/ハク/】
- ・『中岡慎太郎:維新の周旋家(中公新書1146)』宮地佐一郎／著 中央公論社 1993.8 【熊 289.1/ナ/】
- ・『武市半平太:ある草莽の実像(中公新書645)』入交好脩／著 中央公論社 1982.3 【熊 289.1/タ/】
- ・『伯爵後藤象二郎:伝記・後藤象二郎(伝記叢書 171)』大町桂月／著 大空社 1995.6

【熊 289.1/G72/】

- ・『岩崎弥太郎伝 上／下』岩崎家伝記刊行会／編 東京大学出版会 1980 【熊 289.1/196/】
- ・『青山余影:田中光顕伯小伝』熊沢一衛／著 青山書院 1924 【熊 289.1/Ta84/】
- ・『龍馬を超えた男小松帯刀』原口泉／著 グラフ社 2008.4 【熊 289/193/】
- ・『漂異紀略』川田維鶴／撰 高知市民図書館 1986.3 【熊 290.9/ヒ/】
- ・内野勝裕「坂本龍馬と安藤太郎」『あゆみ 第16号』毛呂山郷土史研究会 1990.4 【熊 S229/ア/】
- ・『近藤長次郎』吉村淑甫／著 毎日新聞社 1992.10 【熊 289.1/コ/】
- ・『海援隊遺文:坂本龍馬と長岡謙吉』山田一郎／著 新潮社 1991.3 【熊 289.1/サ/】
- ・『あやつられた龍馬:明治維新と英国諜報部、そしてフリーメーソン』加治将一／著 祥伝社 2006.2

【BM361/アヤ/】

- ・『物語竜馬を愛した七人の女』新人物往来社 1991.6 【熊 281/モ/】
- ・『龍馬のもう一人の妻(文春文庫あ-19-2)』阿井景子／著 文藝春秋 1990.5 【BM/ア/】
- ・『龍馬の妻おりょう』前田愛子／著 新人物往来社 1994.4 【BM/マ/】



彩の国さいたま

※上記以外にも、県立図書館では坂本龍馬や彼をめぐる人々に関する資料を多数所蔵しております。ご希望の資料がございましたら、お気軽にお問い合わせください。



### ★ 資料展示のお知らせ ★

資料展示「坂本龍馬と彼をめぐる人たち」を開催しています。

期 間：11月28日(土)～2月25日(木)

場 所：埼玉県立熊谷図書館 2階展示スペース